

愛媛県美術館開館25周年記念

企画展

大竹伸朗展

2023年5月3日(水・祝)～
7月2日(日)

新館(本館)1階企画展示室
2階常設展示室1・2



《残景0》2022年 212×161×16cm 個人蔵 Photo:岡野圭

東京メトロ東西線の竹橋駅を降り、皇居を左手に見ながら橋を渡ると目の前に現れる東京国立近代美術館。昨年2022年で開館70周年を迎えた日本最初の国立美術館です。「東京国立近代美術館」の館名を示す、一文字ずつ独立したサインが入口外壁に設置され、それらと交差するように玄関の屋根正面に「宇」「和」「島」「駅」の4つの文字が浮かび上がります。赤いネオン管の文字がはめ込まれ、周囲の鉄は古びて錆つく作品《宇和島駅》は、まるでここに展示されることを予め予期していたかのようにそこに佇んでいます。同館で開催された大竹伸朗展の一風景です。

大竹伸朗(1955-)は、東京に生まれ育ち、1988年より宇和島を拠点に活動する美術家で、分野を問わず多彩かつ膨大な量の作品を生み出してきました。ドクメンタ(2012年)、ヴェネチア・ビエンナーレ(2013年)の二大国際展等で海外でも高く評価されています。

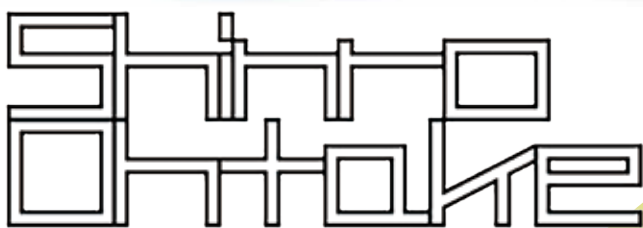
この《宇和島駅》はJR宇和島駅で実際に使用されていた駅サインで、廃棄されるものを作家が保管し、後年赤いネオンを入れて作品化したものです。「既にそこにあるもの」とどめ、残してきた作家を象徴する作品と言えるでしょう。

大竹伸朗は、「この《宇和島駅》を近美に持ってくるためにこの半生を過ごしてきたのではないかとすら思える」と感慨深げに語ります。まだ20代の頃倫子夫人(当時は結婚前)と近美を訪れた時の象徴的なエピソードがありました。倫子夫人が、故郷である「宇和島」と書かれたトラックが高速を走り去るのを窓から目撃したのです。普段意識することもない身近な地名がある時突如として浮かび上がり、強烈な記憶を喚起する一当時はまさか自分が身を置くことになるとは想像もしなかった「宇和島」と東京国立近代美術館との邂逅でした。

この《宇和島駅》は、本展会期中松山城を望む愛媛県美術館の屋上に展示されます。(杉山はるか)



《宇和島駅》1997年 各190×90×180cm 個人蔵 Photo:岡野圭



つぶやき



昨年の5月から、縁あって盲導犬を引退した女の子と家族になりました。キラキラした目がチャームポイントの甘えん坊です。最近では松山でも盲導犬といっしょに美術館を楽しめる方を見かけるようになりました。もちろん、盲導犬ユーザーさんの「目」となって働く、彼ら(犬)に声はかけられません。展示室でユーザーさんと会話しながら、心の中で「グッド、グッド」と応援しています。(鈴木有紀)

アトリエ活性化事業

美術館に行こう！バスツアープログラム

昨年秋から今年の春にかけて、当館初のバスツアープログラムを実施中です。新型コロナウイルスの影響で、館に遊びに来てくれる学校も少なくなり、様々な場面で子どもたちがアートに触れる機会が減っていると耳にして、私たちも何かしたい！と県内の小学校と特別支援学校を対象としたバスツアーを企画しました。当初は東・中・南予から各3校の9校限定でしたが、最終的には18校、約1,100人の児童の参加が決定しました。プログラムは、先ず学校で対話型鑑賞の出前授業を実施し、後日、バスで来館の流れとなります。授業の際に画像で紹介した作品を、実際眼にした時の子どもたちの反応には、何度接しても心が湧きたちます。学校に合わせた体験型プログラムも、美術館ならではの経験として好評です。コロナ禍で移動が難しくなっている学校の先生や、美術館に今まで来たことのない子どもたちからの「また来たい！」のひとことに元気を貰っています。このエネルギーで、アフターコロナに何ができるか、また考えているところです。(喜安 嶺)



美術館のアトリエにおいて、作家や専門家と交流しながら素材や手法について学べる事業を10月と11月の連休に開催しました。

アトリエ1では、幾重にも版を重ね、繊細な作品をシルクスクリーンで表現する岩淵華林氏を招き、シルクスクリーンの工程を2日間に渡り公開しました。また、岩淵氏の制作を追体験すべく、蝶のモチーフ3版で作成するワークショップも開催しました。色や構図を工夫した蝶がたくさん生まれました。

アトリエ2では、原毛屋であり羊に関する書籍を沢山出版されている本出ますみ氏に越しいただき、羊毛素材学を3日間にわたりじっくりと教わるワークショップを開催しました。一頭分の羊毛を広げ仕分けたり、たくさんの素材を実際に触り、洗ったり、紡いだりすることで、自身の創作へのヒントを沢山もらいました。

コロナ禍ということもあり、定員を限定しての開催となりましたが、その時の概要を短い動画に編集し、アトリエでの制作時の一助として活用していただけるように準備しております。お楽しみに♪(田代 亜矢子)



開館24周年をお祝いしました！

当館では毎年11月27日を「愛媛県美術館」として再スタートした開館記念日として定め、特別なイベントを行っています。毎年恒例のコレクション展無料開放や、美術館前の石だたみにチョークで絵を描く「大地は大きな黒板だ!」のほか、伊達めがねに飾りつけをするワークショップや、学校向け美術鑑賞教材「アートカード100」を体験する機会を設けました。

また、来場者と美術館、音楽と所蔵作品をつなぐという目的のもと、展示室内でミュージアムコンサートを開催しました。ハンドベルサークルのプレーメンリンガーズさんをお招きして季節にぴったりの曲を演奏していただきました。当館からは曲目に合わせて選択した土田次枝らの油彩画を展示し、会場はあたたかい雰囲気になりました。

今年(25周年!)もお楽しみに。お手伝いに参加してくれた美術館ボランティアの皆さん、ありがとうございました。(金成 めい)



昨年の4月から美術館で勤務している者です。愛媛県美術館には、勤務する前から何度も来館しており、今でも休日にプライベートで来館するくらい、大好きな場所です。そんな美術館に沢山のお客様が来ていただけるよう、今後も全力を尽くして業務にあたります！(成本海璃)

コレクション展 IV
コレクション・ハイライト

睦地梅太郎 生誕120年

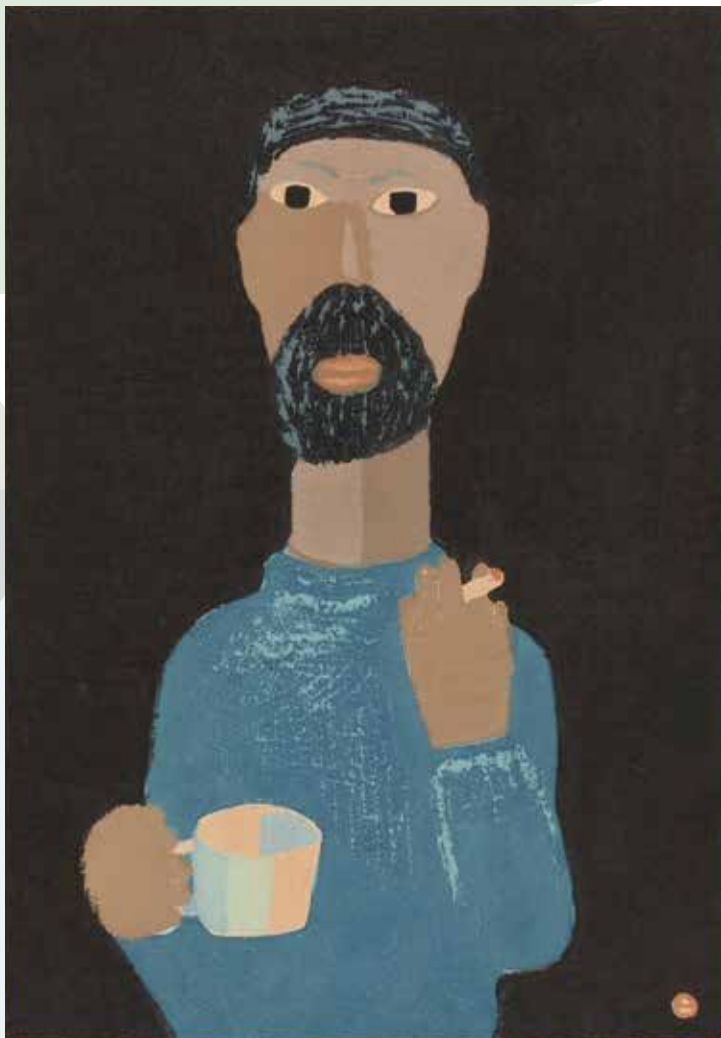
—うめたろうの「め」—

2023年2月8日(水)～4月9日(日)
新館(本館)2F 常設展示室2

版画家・睦地梅太郎は、1902(明治35)年12月に宇和島市三間町に生まれました。コレクション・ハイライトでは、睦地生誕120年のお祝いとして、その作品の「眼」に注目した作品をご紹介します。

上京後、内閣印刷局活版課の仕事で鉛版に触れ、版画家としての一歩を踏み出した睦地は、その才能を平塚運一や恩地孝四郎といった創作版画の旗手に認められ、日本版画協会等を活動の拠点としながら、山を主題とした版画集をいくつも刊行し、山の版画家として知られる様になります。山の表現について試行錯誤を重ねる中で、1953年に山に生きる「山男」が誕生します。日本固有の山から無名の山男へ、主題の変化によって睦地の表現は自由になり、同時に国際的な評価も獲得しました。そこから生涯をかけた「山男」の表現が続けられていきますが、今回は、その「眼」に注目して作品を選び展示しています。簡潔な色面で構成された木版画の中でも印象的な黒一色のまなこ、その中に喜怒哀楽が存在し、その感情がみる側にも伝わってきます。120年目に睦地の「め」と眼をあわせて、その魅力にぜひ浸っていただきたいと思います。(喜安 嶺)

《山男》1953(昭和28)年



column

生誕300年 吉田蔵澤 —清廉なる画境—

2022年12月3日(土)～2023年1月9日(月・祝)



江戸時代中期の松山藩士で、雄渾な筆致の墨竹画を多く描いたことで知られる吉田蔵澤(1722～1802)。その画は、古くから「松山の宝」として珍重され、「竹の蔵澤」と称されて愛好者も多く、近世伊予の画人たちの中ではいち早く高い評価を受けてきました。

蔵澤生誕300年の節目となったこの機会、ささやかながら当館所蔵の蔵澤作品9件を一室に展示しました。その画にはいずれも独自の気迫と緊張感に満ちた画境が示されます。蔵澤は、民衆の立場に立った政治を信念とし、気骨にあふれた清廉剛直な人物像を語る逸話が残されていますが、彼が描く墨竹画にもその人格が深く投影されていると考えられます。画中に込められた蔵澤の気迫がまさしく一陣の風となって、鑑賞するこちら側へも吹き抜けてくるようです。さながら展示室が竹林の中になったようでした。

展示では、蔵澤の画風形成に影響を与えたと推測される、松山の学僧、蔵山(1711～88)と明月(1718～97)の墨蹟や、蔵澤の熱狂的なファンであった子規と漱石の書画も紹介し、現在に至る蔵澤評価・愛好の歴史にも触れました。

この先も、「松山の宝」として長く愛されていくことを願うばかりです。(長井 健)

貸し
ギャラリー
あります。

愛媛県美術館には、普段みなさんが企画展などをご覧になる展示室だけでなく、市民が発表の場として利用できる貸しギャラリーがあるのをご存じでしたか？

本館2階西奥の特別展示室と、南館の各部屋は市民のためのギャラリーとして有料で貸し出しを行っているのです。

長年作り続けてきた作品をお披露目したり、個展のために一念発起して制作をしたり、南館のアトリエで制作したものを仲間たちとグループ展示をしたりするのもいいかもしれませんね。主催は個人・法人を問いません。1月から、空き状況確認から予約までがインターネット上で行えるようになったので、よりご利用いただきやすくなりました。

当館でみなさんの作品を見ることができると楽しみにしています！(金成 めい)



南館県民ギャラリー



本館特別展示室

トークセッション 「白川義員がとらえたもの」 ふりかえり

追悼 白川義員写真展 「天地創造」

2023年1月14日(土)～3月12日(日)

1月14日からスタートした追悼 白川義員写真展「天地創造」、初日のトークセッションの様子をお伝えします。白川氏と生前に交流があった土居英雄さん(愛媛新聞社社長)が冒頭の挨拶で述べられたように、「いま白川氏のこと語るに最良のメンバー」の3人、関次和子さん(学芸員・東京都写真美術館事業企画課長)と村上仁一さん(合同会社 PCT/雑誌『写真』編集長)、杉山はるか(当館学芸員)が愛媛県美術館の講堂に集まりました。画像を交えながら作品の解説や生前のエピソードをお話する、白川氏の魅力に迫る充実した1時間半となりました。

◆若い時代

白川氏が写真という表現方法に魅せられたのは、青年時代に映画『駅馬車』(1939)に登場する西部アメリカの広大な土地の風景やユージン・スミスの作品から影響を受け「写真には言葉が無くても伝える力がある」と考えたからだと言います。親戚に買ってもらったカメラで本格的に撮影を始めたのは中学生から。高校生の頃には撮影の仕事を依頼されていたそうです。構図を構成する才能は早くも高いレベルに達しており、早熟な少年であったことが伺えます。

◆独自性

既に白川氏の作品をご覧になった方はご存知かと思いますが、「色彩」は彼の最大の独自性であり、彼が強くこだわりをもっていた部分だと村上さんは話します。白川氏は凸版印刷(株)とタグを組み、経年劣化した作品のポジフィルムをスキャンしてデジタルデータを作成したのち、データ上で色を補正し、そのデータを印刷原稿にして「7色オフセット印刷」でプリントを作成しました。プリントは今回の展覧会でも使用されており、色彩について高い再現性を誇るとのことです。

◆とらえたもの、遺したもの

『アルプス』から『天地創造』までの12シリーズを撮り終えて「私の写真は完成した」と白川氏は話していたそうです。彼が生涯貫いた「地球再発見による人間性回復」というテーマは、今私たちが立つ地球と人類の関係を改めて捉え直すよう呼びかけます。これは昨今の環境問題への関心の高まりにも関連するのでは、と関次さんは話します。ぜひ白川氏の目がとらえた地球の一部から、人と大地の営みに思いを馳せてみてください。

(金成めい)



《ザ・ウエーブ・アメリカ》個人蔵



A5サイズのメモ帳



新コラムの第一弾が学芸員ならではの、というツールでなく恐縮ですが、私の仕事道具で最も肌身離さず使っているのは「A5サイズのメモ帳」です。展覧会の準備事項、調査した史料の情報、聞き取りしたお話や今後の事業の妄想など何でも書き留めています。開くとA4になるサイズが私にはちょうど良く、外に持ち歩いても頑丈で、クリアポケットもあって薄い資料も入れられる優れモノ。学芸員としても館の管理職としても欠かせない相棒です。(学芸課長 土居 聡朋)



— であうつながるひろがる—アートの宝石箱—

愛媛県美術館
<https://www.ehime-art.jp/>
 〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
 tel.089-932-0010 fax.089-932-0511



美術館HP

ご利用案内

- 開館時間 9:40～18:00(入室は17:30まで)
 ※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。
- 休館日 月曜日
 (祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日。年末年始は12/29～1/3が休館日)

編集後記

今年、愛媛県美術館は開館25年目を迎えます。カンフォロも25年継続して刊行し、美術館の歩みを刻んでいます。これからも美術館の様々な情報をお伝えし、記録していくことができたいと思います。一部バックナンバーは、ホームページに掲載していますので、ご覧いただければ幸いです。(石崎三佳子)